

出口

E氏(アルコール依存症 50代 男性)

31才で、袋小路に、はまっている事さえ気が付く事が出来ないまま、ただ酒を飲むだけしか出来なくなっていました。飲み代欲しさに借りたサラ金の10万円が2倍3倍に増えていましたが、働いているから本気を出せば直ぐに返せると思っていました。その職場も夜勤専門だったので、休憩時間に裏の公園で飲めばゆっくり休めると思い、勤務中も飲み出していました。気が付くと缶ビールや焼酎の空瓶が公園のベンチ周辺に沢山転がっていました。職場で同僚が何か言ってくると、怒鳴ったり、暴言も吐いていました。上司に呼ばれ、日勤でやり直そうと言われ、日勤に来た日の昼食に勤務先の横の食堂で、多数の従業員がいる中、酒を飲んでいました。それからは連続飲酒の毎日、ごみ溜めの部屋で、精神病院に入るまで、訳の分からない、酒だけの日々でした。病院でアルコール依存症と診断されましたが、退院したらどうせすぐに飲むと思いました。主治医に2～3年棒に振るつもりで自助グループに行きなさいと言われると、なぜか反発心が膨らんできました。棒に振れとは何事だと思い、失敗したら医師のせいに行こうと行き始めたグループで今もやっています。そして今は、人生が袋小路だとは思っていません。多くの仲間が、泥沼から抜け出たプログラムがあり、生きていれば色々な問題にぶつかりますが、それを乗り切っている仲間の姿を見せてもらいました。出口と言う表題にしましたが、一人で考えるとどうしても悪い方に考えたり、客観的にものが見えなくなっている時がありますが、ミーティングでの仲間の話の中に、大きな気付きが潜んでいる事があります。酒を止め始めた頃、今日一日止めれば良いと教わりましたが、たった1日が気が付くと50代になっていました。飲んでいた職場に戻り、社長にアルバイトからやり直せと怒鳴られたり、同僚に白い目で見られたり、その職場が倒産したりしましたが、同じ病気の仲間の中に居たおかげで、この歳までやってこれています。